海外研修先のモルディブで植林
（立命館慶祥高校）

授業を受けるなど交流を深めている。アメリカの提携校からは毎年数名が２週間程度の日程でやってくる。

この夏の「国際フォーラム」ではこれらの提携校の代表を招いて「21世紀に生きる私たちの課題」と題したパネルディスカッションが行われた。登壇した各国のパネリストたちは、「言葉を交わし、知り合い、協働して、相手の文化や立場を尊重することが大切なこと」と、異口同音に発表していた。角副校長によると、「海外研修では、海外の同世代と心が通じ合えたことに一番感動するようで、短い滞在にもかかわらず、オイオイと泣きながら別れを惜しむ光景が毎年見られます」というほど各国の若者との交流は心に残る体験を生んでいる。

この日海外からの参加者の紹介に続いて高杉校長が英語で開会の辞を述べ、その後すべてのプログラムが英語による司会、発表で行われた。６カ国８名のパネリストも、それぞれの言語にかかわらず英語であった。日頃の同校の外国語教育をかいま見た気がした。各国の人々と接する時必ずしも英語だけが唯一のコミュニケーションの手段というわけではないが、同副校長は閉会の辞の中で「言語（英語）は私たちの世界を広げてくれる道具であることはまちがいありません」と述べていた。同校では高校２年生で第二外国語（独語、仏語、中国語）を選択で学ぶこともできる。

### 学校祭のテーマは「アジア」

同校の国際理解、異文化理解教育の良い例をフォーラムで行われた生徒による歓迎パフォーマンスに見た。一つ目は、日本の民舞のひとつ「中野七頭舞」で高校２年生のクラスが独特の楽器を演奏し、演じた。農民の豊穣を祈る踊りで、ラオスなど東南アジアに見られる民族舞踊と非常に似ていた。二つ目は、「沖縄エイサー」であった。３年生が力強く踊り、姉妹校の生徒たちをステージに呼びあげて会場と一体になってフォーラムを盛り上げた。これらは生徒が企画・運営する学校祭、「立命祭」のクラス対抗パフォーマンスからの作品だという。今年のテーマは「アジア」で両方とも日本と近隣諸国との古くからのつながりを感じさせる芸能であった。

語学をひとつのツールに、足元をみつめ、海外を知り、世界とのつながりに目を向けている高校生たちの姿は見事である。フォーラムの当日は、保護者、海外提携校の友人たちを受け入れたホスト・ファミリー、一般市民などが在校生1,047名（中学生128名、高校生919名）とともに、世界を身近に感じ、世界を考えた１日であった。

## 北海道札幌国際情報高等学校

### 新しいタイプの公立高校

北海道札幌国際情報高等学校（札幌市北区新川717番番地１　青塚和春校長、生徒数953名）は、社会の国際化・情報化が進む時代に対応する教育をめざして、普通科、国際文化科、情報技術科、情報システム科、流通サービス科の５科を擁する新しいタイプの道立高等学校として平成７年（1995年）に開校した。

中でも、国際文化科は広い視野と国際感覚を備えた生徒の育成をめざして、国際理解や国際協力についての知識を深めるため、１年生からグローバルなテーマに的を絞った英語による素材を用いて諸外国の文化を学ぶ「外国事情」の時間があり、２年、３年生ではＬ．Ｌ．演習が必修など英語教育の比重が高く、実践的な授業が行われている。

### 全道一学区の国際文化科

各学科ともそれぞれ専門性の高い科目の学習とあわせて、第二外国語やコンピューター関連の科目が選択で履修できるが、特に、国際文化科では、２年生以上がフランス語、ロシア語、中国語、ハングルのいずれかを選択することが必修になっている。今年初めて行われた「第二外国語発表会」では３年生を中心に日頃学んでいる言語による暗誦、詩の朗読、歌、人形劇などが披露された。

英語に関しては、１年生から総合英語に多くの時間がもたれ、高学年では英語表現や時事英語の時間が増えるほか、同校には英語を母語とする英語指導助手（ＡＥＴ）が常駐していて実践的な英語学習を進めている。しかし、専門にかたよることなく、１年生では、特に週一回のミックス・ホームルームは学科の枠を取り払って開かれ、各科の生徒が混じり合って行事などについて話し合う。

英語セミナーでの英語劇
（札幌国際情報高校）

毎年学校祭の行事の一つとして開催される国際文化科学科展では、市内在住の外国人を招いて“ここが変だょ日本の高校生！”と題したディスカッションをしたり、選択科目で日本文化や日本語、比較文化、国際ボランティア基礎なども学ぶことができるほか、学外の講師による講演会なども異文化理解にもつとめている。

### 海外語学研修制度

同校が目標にも掲げている異文化理解や国際理解を進めるために、留学、韓国見学旅行、海外姉妹校、課外教育の一環としての海外語学研修を実施している。

姉妹校は開校２年目の平成９年にエドモントン市（カナダ・アルバータ州）にある２校との提携に調印したのに続き、平成10年にはハルビン市（中国・黒竜江省）の１校とも提携調印し、毎年双方から10名程度が訪問しあっている。交換留学は、２期生から開始し、毎年２名づつが英語圏の学校に留学。受け入れも数カ国から来校しており、常時１クラス１名くらいの留学生が在籍している。

生徒たちが楽しみにしているのが海外語学研修で、一年生を対象に冬休みを利用して、これまで英国（２回）、ニュージーランドと実施してきた。今年は英国での研修が決まっている。これは課外研修活動として行われ毎年30名程度が参加しているが、研修テーマ（相手国の教育制度、バリアフリーの現状、ボランティアの実際など）を選んで事前に学習して出かける。海外へ行くのは初めてという生徒も多いが、「高校１年でホームステイはじめ感動的な体験ができて幸せ。これからの刺激にしたい」「逆に日本の良さに気がついた」とか、ニュージーランドでは「少数民族のマオリ族の人たちは、優しく温かい人たちだったが、彼らは大変な歴史を背負っている」ことなど実感して帰国するなど、英語力の向上と異文化体験を深める機会になっている。

さらに、秋に実施されるのが英語合宿セミナーで、１年生が英語づけで二日間を過ごす。語学力向上の契機になることはもちろん、生徒同士の仲間意識を生む場として、また異文化体験への入り口として毎年続けられている。

幸運にもこうした様々な体験をした各校の生徒たちが若い豊かな感性で受け止めたことをもとに、将来、世界のどこかで何かをより良く変えていく精神と能力を鍛えてくれることに期待したい。